> 13
3397
5F

へ 13
3397
5

又本新

國字鶺物語 五の巻

東都芍藥亭主人著

清風花

昭和五年

艾虎怪を爲て隼太愛子を射る話 附二人妖猿兒を烹て義廉旧識を會ふ話

猪隼太廣直ハ鍾愛の兒を自の手ふけてうしなひ
くれば心不樂山へも不往めうくれど身ひらはて五六日
を糊るのくれば最貧く三七日も過ぎて又も獵ふ出て獲
物提市ゑ行て賣んとなるふしめく平家の士難波六郎
經清ゞ吉備前州うゑ上ゑ往會うゑ。隼太頭巾まぶらふ
ひき被て足疾ゑ行きゞると。經清めゞゆく見認てめゝ

搦よとの声よつれ従卒ぞろ〳〵と取巻こそ。隼太刀をぬき放〳〵一方をきりひらき危急を脱家に帰てこいるハ。
經清市の長に問ふ我ら家もくゆ知らぬ〳〵笛竹の
上綱雅丸の二人に獅王の剱をそえて程ちかき山寺ふ忍のぐ
せゞさと菖蒲のゆを上のるふ居置二人の児妻の群萩
をも追ひやを一人爐のもとに両脚さしのべ仮嘯髯ひき
撫てぞ待居こる夜も二更をぐるころ難波六郎經清家の
四方を取圍衛門をおしやふり這入の戸をひき放〳〵呼門
もせぐつと入り来りめづしや隼太廣直昼の圍ハゆるゝ
とも今ハ不脱置の兎めやゆ笛竹綱雅とも家にうくまい

家捜せんいふ〳〵と詰寄る猪隼太居直りて斯いふハ
面かくれど命活人と忍ばこそ同僚をづくして宇治
の軍ふ戦死せし中を遁のびて獵夫とまでゆくさぐつれ
斯ある上ハ何をつゝまん仲綱の児綱雅丸ハ宇治橋の軍破
る前に渡辺競ゞ伴ひていづちおちやきくんいざ不知僕
おめ〳〵と主人の陣没こそふえて脱し冥罰おそろしさふ
せめてもの罪かろがるとめやゆの終身をえつゞん為
兒三人妻ゆをとも山西山村に潜居て獣を獵代ゆして世を
とくらめ獵る獣に劣し心源三位の従士にて渡辺競ゆ

猪隼太とうぞくられる分のそれも兒ようひうさう氣の
ようこうのやまちながら首子の鶴太ハけれど僕がまふりけ
て殺せしも主ようを反報ぞと不問語ようの時うつると經清慌て
鬼の眼のそう泪ようを魅きて猶豫かせそ四方ハ人數ようを圍せ
ようこう論ハ無益家搜せうといふうそくまぐそをひきし
従卒等我先おとこみ入りくあやめのお群萩くしめ鶴
二鶴三の二人の兒等泣さけぶとも會釈なく難波ぶ前ようを引
居る經清再隼太ようむうひ二兒ともふ色黒く眼圓くいそ
でも汝の兒とハ灼然綱雅ハいづくようくせし首伏せどハけ二兒
を責さいかうていくるべし迚もうくし果ぐうた綱雅をく

まひだてして汝夫妻二人の兒まで命おとさんうう所在を
告て後榮をそうられようとのぐれうさかきあうさるふ隼太累
息ゆうとつきてくうぐめおもいふ如く兒輩ふびんとおりくば
こそ世の議論をも不顧斯あうるしき業をもされ僕くしめ
二人の兒あやめのお命をぐふ助んとの言ようぐそぐハ競
が所在郷導して綱雅討せまあくせんと聞うう群萩膝
をうう者日来ようも似ぬ心底やあのあや狂ふうぐをつくし
て殺しくる獣の夷やえ入れしと恨あげくをえもうらぐ
うれうう直ぬ引路せん處ハ丹波五箇庄と立あげるあやめの
おハ打卧てつやくあのをもいふ生ぐ群萩さてハと心もし

猪隼太
虎の妖に
遇ひて
鵺二を
射殺

えづまれど猶おがつらのくろはるをつきのけ蹴飛〜走
て出づゆざん〜てさうゐがはな綱稚の首えるまで人質ぞと
鶴二を抱せ經清ハ近ふひきそひはるゝえやく丹波國五ケの庄
ハ頼政のゆうゐある地あれバとて渡辺競綱稚丸を伴ひて潛
居競ハときて宗盛卿のめしつかひ山者捕得さるんのの
ハ賞金心よまうをゝ〜と街衢ゑ標札建てきびしくめとめ
のくどもさえて所在の知れざるしゐ猪隼太が叛心ゆうゐて
所在知れ〜らバ二人ともゆ搦取れとて難波六郎經清ゑ從
卒ゆゆさそてさ〜向ゐる猪隼太ハ競ゞ家ちらくはこうう
声あげていうゑ山家ゆ渡辺競や在隼太廣直あやめのお

の巾命をん為平家ふまゆりるさゞひぬ足下ゝそ宗盛卿の
巾ゆくしこつゑゐれバカなし稚君ハ隼太ゞ命ゑ換て救ひ
奉て出家させまゆ〜せん疾出されうゝいそもそてゞ渡
辺競躍出歯を切眼を見張て猪隼太を睨バ鬢ふつときれ
て髪さゞらぢ眥裂て血をそゝぎ猪隼太の名ゑ應て獣ゆ
ひゝき心ゝハ露ゆ〜で稚君の所在為知置〜ゝそゝちを
ゐれゆやめのお笛竹の上のはゆゆゐても稚君の巾命大るとゆり
べきを世ゑ在でもるゐけぬあやめのゆを救んとて稚君を搦
させんとするるゆやゆる思ゆ汝ら首をつぎ兒の命助んとて主
君のゑきゐれゞることゆる稚君を首告せ〜ものゆ〜んさそゆり

つるゆきのとも初めで孤を托めい〳〵三品殿の家運の
季宇治橋の一戦よりめく亡びめいしもてきうく〳〵や
稚君ときとも平家の残忍汝が狼戾いくで世とば經のん
清和天皇十一代頼政が孫仲綱が男綱稚丸が血戦又覚居
て後代の話柄よせとやとて左ふ綱稚を抱右ふ長劔揮て
隼太をめげ討てくる經清又て隼太討きな取圍く
討くれと指揮きれば一人の敵の兒を抱て隻手ぢうめ
動を又めゆどう我搦んと群ゑ寄る左を拂ひ右ふめくう
まく〳〵く間ふ十四五人切伏るは驍勇ふ〳〵ひて近寄
從卒もあ〳〵ぶれば柳の幹を小楯ふ取り息をつぎ居〳〵

後ろ〳〵おひひみめく猪隼太つと駈寄りて羽ぐいぶめふ
抱きそめめども寄きと呼るふ競もそれまでとを思ひ
うん長劔投きて短刀めきて綱稚丸を刺殺〳〵隼太を
とめふ貫んと柄も拳も通れとて我が腹ふ突立る隼太ハ
夫と心を得て分をうくせば短刀の鋒三四寸背後ふ白く
あ〳〵くれうう競ハ為損じくちを〳〵と振ゑりどきて突
うんしど重創ふようう遂ふ隼太ふ討れくれば經清二人の
首携へ笛竹やうくれ居と〳〵めく搜せど影ぐふ又えぐ
稚競を討くる上ハ一人の女何るをう為出さんきて急ふ
て人質の鶴二をう〳〵今うう平家ふ仕へくきもんど

玉環の夫
集たか
季四ん
鶴三
小こうろう
老級

石川義麿
俗に者とり来かりて
集たし名のり合ふ

猪隼太ハあやめの笠、笛竹の上、僕夫妻二兒の命をそなへ、
なほ外よりなほ」とて、たゝうをみひきそめ、播磨の國
へそゆく。世挙て隼太ら所為を悪しゝ二士ら精忠か
ゝた死策を為得て眼珠烏悪猜深き平家を謀りゝ
け後ハふゝく世を志のよ分よもあゝさんと外ゝ為へき産業
もなく、又真の綱雅丸をやくまゝよも便りゝと業をもゝ
ゝ故の西山村よ住ぬ。ある日例をく山よ行んとて弓箭手狩
立出て路程三四丁も来ゝるとゝ後ゝ群萩ら声
としてやよ今鵺二の余念なく艾虎を弄ひ居ゝ其虎
自駈出をを鵺ニも追ひけ出ぬ妻も余りのあやし

さふ出てゝれど影もなし。いふ足ゝけゝるハぞやと怪て隼太
打驚ぬを右よふり左よ揮足をぞゝて望ゝるよ左の方ふ
ゝ遥の山脚を鵺二ゞ物追ひ行く姿さゞやうよゝも
あやゝて溪よゝり、岨をつゝひ徑をもとめ息のゝぎり駈
まども追ひつきゝぶゝゝるゝもし俄よ風おとゝ来り
樹を揺石を飛ゝ一の虎あれよあれて鵺二よ飛ゝゝひき
くゝゝて叢よ入りゝれバ隼太ハ余のゝよ心まどひて吾
國よ虎あるゝを不聞こハ夢よ魘よやゝおゝどゝんさぐゝを
べきふあゝざれバ弓よ箭つゞて追ひけ行矢ごろハ少し
遠ゝれど南無石清水八幡宮と心よ念じきて放よあや

まさに虎のさぐ中射貫羽ぶくらせあて立るよぞ走り
来て我兒ハいろふと尋ねばこハいろふ虎と見るハ一塊の
大石よ失さる皐比の覆さる鶴二ハ其石よ敷れて死し
居さり箭の石を貫さる奇ずよも心つらぎ比ぐさり
愛兒を引つぎ失ひさるふ剛氣も撓石ひき起せ力
ぶよかうしを山賊のえとめて力をそく亡骸を家路よ舁て
ゆうりう虎とえて石よ立箭などさる故事ハ漢の李廣
ぐるすかぐ呂氏春秋よハ楚の養由ぐるすと記せり正し
といふ史よさくまちくあれば例の漢人の文華とのこそひ
居まる疑もこれをえバそれぬん。さても隼太ハ二人の兒

しをくど男の胸のひろくなれバおひめきくむるさも
ありぬべし妻群萩ハ歎きぐそれ飯さく咽よ下ぐれど
季兒鶴三ぐいまぐ乳房をかさぐれバ乳ひて粥など泪くも
よ啜つ日月ハ梭を投ぐ如くまぐれど倭文の苧環繰さく
も歎よ涙うぐそひて夜やの家留竹もそりわ言をのこ
かうれり程なく鶴太ぐ百ら日鶴二ぐ三七日ふもかうぬれバ
隼太ハ上冢せんとて朝まぐた出行き群萩ハけりどの愁傷
よ打まて泣さるまさかきめく汚さる衣又二方の夜の食
も辭んとて沸うて珠躍る湯を大ある盥ふ汲さりて既
水さくて衣どもおくくいれんとまる時よ奥の方よて

あやめの上胸のふつくく痞さ〳〵こみあひて妾一人の力
よりあひぐと群萩のおもてハおくさぬゝと笛竹の呼るゝよ
衣ども投やり水ともさゝで上の間よ走り行き足の指折
るゝめ胸のとおさなどさゝめく双抱まるうちゑ抱びみる
綱稚丸も鶴三もさゝゑ阿と叫ぶよあやめの上とバ笛竹よ
委急きと走り出るうういうよせん〳〵と声のうぎり哭泣よ
あやめの上も痛忘れ笛竹とゝゑ立出るバ鶴三ハ盥ゑ
汲忘る沸湯の中よ打込めりてゐし綱稚丸ハ側よいゝく
おびえて泣入さり人々ハ鶴三が自這入りしるとのゝおゝひ
群萩ハ海鰕のゝく色うゝ稚児とゝき抱臥まろぶゑ外の

方より一人の優婆塞まよ一の猿と提て入り来り某ハ諸
國經歴の者ゆて助力受ん為此家よ来りたしよ此猿一人
の稚児と沸湯よ打入れ一人の児とも捕へんとしておそゝ
容のりて外の方よ逃出るとと捕へんとし家翁ハ獵と業とせる
人とゝ思猿よ怨受のよ故のりや否と定んと思ふいゝ主翁ハおとさゝでやとめゝりゑまし
故のりげよぞ立居さる

寄生木

旧怨と訟て菖蒲白双よ伏話
因縁と感て笛竹金仙よ帰話

猪隼太ハゝるるりとも初ゝで後り来り此よ聞り猿と

菖蒲のおのふ
つきたる韓衣が
霊もぎしてすを
物祝て自害
をしたる

後女の恋ゲ文
天野信俊法師
懺悔物がたり
を為

ちて一刀に刺貫有髪僧の顔さしのぞきほとつさて
めづらしやうぞふきバ廿年あまり八年先に鵺を射ると
の勅に ゑさゞいぬハぶらうり罪を得て世を遁れあると
聞し 石川左衛門尉義廉君と又ゑまうしハゝ目ら
斯きうゑハ猪隼太廣直があれのゝそあれなるハ頼政ら
室のやゝ仲綱が室笛竹うれなるハ仲綱らとられるこゝ綱
雅丸ゝて侯と聞ゆるに有髪僧を座とめゝゝ同し源
の流ハ汲かゞゝまく世を遁れしうバこれまでゝえまゝ
せゞと人ゝに名謂し 某勅命にそむきしるハ弓箭の
ゑ疎うゝ故ゝど人いらゝめゞ原某慈に弓馬の道に志

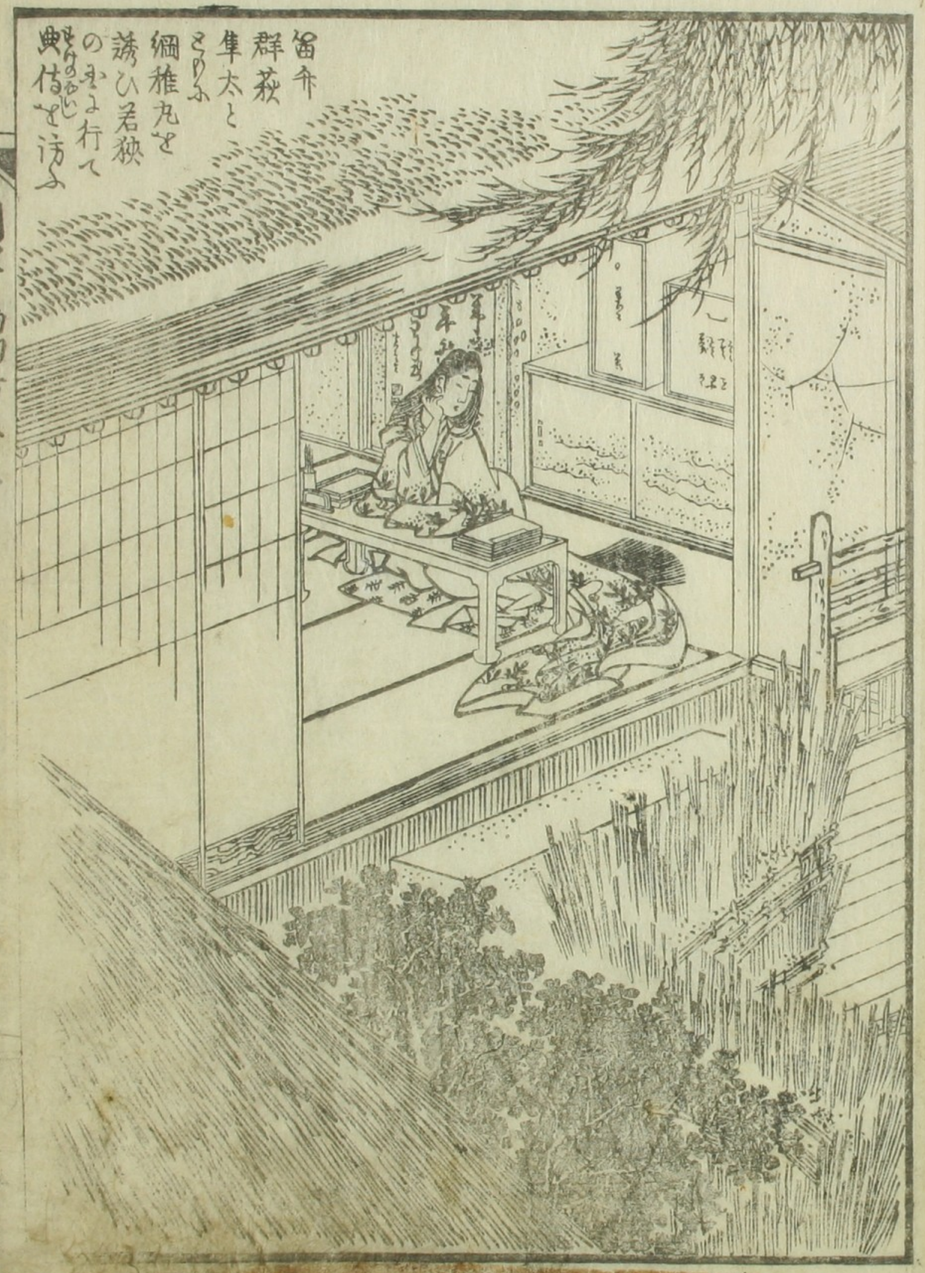
深く弟義基義資ハ最弱く白馬に鞭を挙て立ての柳
を折り水禽に箭を費て一箇の女を挑む風流にのゝ心を
ゝゝれバ父義經義家子二男義我基に愛深く家嗣せんとゝい
めゝど一族も郎従もうけがゝゝて某るゞに託て世を遁弟
義基に家嗣せて父の志を遂させまゝゝせんと思ひまゝ
ゝる時ゝゝあれ鵺を射ゝゝの勅命に不應罪にゝうゝて
禁錮を幸にさゝてゝゝ世をバのゞれゝとて三女の夭逝て
冤を告鵺と化て近衛帝を脳せしうなゞおちもあゝ
詰に出るに隼太もおゝひあるうゝありとて皐比の革
怪をなゝて仲綱をゝゝめゝ遂に獅王の劒の德にようて

退き血と蓄生塚より引るる火繩首ふまとひ切るどけぐ
蛇とゆりて鶴丞と殺しも皐比鶴二と誘ひ行きて射殺させ
しるる又今猿の鶴三とせで殺せしも皆三女の為とぞ
あして鶴の昊ゆりしおそろしき犯念ゆ邪されど綱稚丸
の身の上恙なりしるハなげきの中の歡くと人と顔とえん
合せてえぞし辞もあきとうう今まで留竹群萩と花
よ泪ふられ居るあやめの赤さうくと立て妾こそ美福
門院のえうひあて縊られる韓衣が亡魂あれ姉妹三人
究よ死しる恨とむくいんと産時の因縁よつなぐれて
三人の怨魂ひとつの怪獣とゆう美福門院のいろくと

おもひあよ近衛帝を脳しし奉りとし頼政が矢先よりう
命をおとしめれば又頼政隼太ハ更よもいえぞ其一族
さくうめしく邪崇とあらんと思へども政が世と蓋英
氣よちうりぐさてこそ鳥羽帝の寵愛ふきのあ
の赤よ心とうるこそ幸なれひる發覚て罪よおとさんと
政ううおらる書の匣の底よくしあると取り出して玉環
が上皇のもふよ落しるとおゆひきや逆鱗もあくあさ
頼政よあやとうあせうう是ハ寛ある仁とハいひかう
政ふつうある答勅なし奉らバ勅勘とも蒙るべきと
秀歌の徳ふうして妾が謀むしくゆうめさバあやめよ憑

まゝに頼政が平家をあくむ不平の心を激し軍を興さゝせて憎しとゝゝ一族郎従一時に亡さんとあやめが続舌とゝり時よふれて英邁の氣を揺せどゝく時勢を知り成敗に明かれバせんなくめ老て氣力衰へると待その間に近衛帝の宝祚を縮め上皇美福門院に憂目えせ保元平治の乱をおこさせ上皇美福門院崇徳帝の仇命をもとり二条帝の叡慮を乱して近衛帝の皇后を娉させ平相國の心を驕らせて後白河の上皇を幽さるゝなど皆我こが怨魂の所為こ中に後白河法皇ハ宿世めでたくまゝして聖壽縮め奉るふゝ〳〵これハ長くこゝきあえず

奉ん其皇子二条帝ハ二十三高倉の宮ハ三十皇孫六条帝ハ十三にて崩さゝめゝ高倉帝ハ今年二十にゝゝめゝらんこれもやゞて崩さゝめん此夏ハ我こが旧怨をとゝるけべき時来り仲綱が鍾愛の馬を王環が奪て宗盛卿に与へさるゝるゝ發て頼政父子所従も不残亡び失ぬ妾宇治川の浅瀬を渉て田原又太郎をうちびきせしゝゝ軍くゝやく果しゝり河内路へまゝり淀一口へもむゝかゞめゝバ宮も頼政も南都へおちのび諸國の源氏これに應じて奥なバ我こが宿意をも遂ざゝまし我かゞ小蛇とかりて忠綱を誘めるゝりしくもふるまひつとおもひぬ此君が


留弁
群萩
隼太と
さりふ
細雅丸を
誘ひ若狭
のまよ行て
典侍を訪ふ

仲綱をかやまをて獅王の劔よ刺き頼政をうりそゞめて無花果の詠をのこさせたるゝの成と不成とハ氣運よ繋まるよぞあるゝあやめ代て楽道をそうるハ修羅道の苦受るうちの一兵といひなゞ〳〵あやめを他人のめとみ為せと思へバ〻隼太ゞ三人の兒鴆をもて号るゞ最あくさよりくるゞ取殺しぬ綱雅よあゞせんとまれど獅王の劔の摹形爺伺よ籠て肌身不離バカなし笛竹群萩るよ不開バ怨とも不覚あやめ實ハ妾ゞ叔父天野信俊の女を従母姉妹かゞゝゞしまても上皇の寵愛ふゝうしゞ妬〳〵れバ斯為ぞ義廉主さゝバとて短劔めくゝえ〳〵ゞ咽よ突立るすきれうゝ創口ゝ一塊の心火飛出るとえれを今まで九だりうよえゝうし〻あやめのゞ半百よちゝき容貌とゝゝるぞあやし〻き側をえれバ刺殺〳〵る猿もええぞ笛竹綱雅ハあやめのゞの亡骸ゞどゝをゞり泣まどゞ群萩ハ三人の兒を喪ひ又あやめのゞの自刄をえあるゝのるよ涙も出ぞ人〻の顔うちまもり居〻しゞ韓衣ゞめのゞゝうを聞よつゞ女の身のあゝ迄きを顧て烏髪ゞ切女僧とあれバ笛竹も後きしゞ〻そつゞきて髪をゞ截きりゝさ〳〵もゞ猛き猪隼太も髻拂ひて釋門よ入んとまるを義廉ゞ〻ゝ吾子ゞ鴆を刺る公事かゞ〳〵女の犯念

ふく三兒をうしなひたれば今ハ恨もなるまじ吾子釋門に入れば誰か綱雅を守らん再家を興さんと綱雅父叔母典侍二条院讃岐若狭の國田島に謫され神尾權次郎と監典侍ハ女なれども十三經をさとり講ゐる戈女なれば權次郎も最重んじ心を傾てしづき仕へと聞て忘れがたくハそこふくれ伊豆の國なる叔父藏人大夫頼兼がもとへ下りて源氏のうちに英雄の奥を待べし某が弟武藏守義基既高倉の宮に忠をぬき宇治橋の軍破れて平家に囚れぬと聞く才義資男義兼等が行方もおぼつかなし頼兼東國に下りむくの軍興さん頼兼うりの迎の兵士ハ若狭田島まで

のぶ長べしと外に出ん信俊法師親子の對面いとさらに よといふ声に つれ七十ばかりの老僧杖にすがりて入り来りあやめのふが死骸を揺て動かして泪ぐみ某壯年のあやまりにて産業を亡ひて剪徑と迫り下り山播州に さるゝ ひあるき室の妓に馴初て懐孕しが其方なく伊勢のむに ゆくりめる船主に憐をひて志摩の國鳥羽の湊に ふ長しかりし不良心をふつとさめ勢州洞津の町に はこうのあて未定なる家業もなく過るうちに妻ハ産の上にてうなくなりぬ孩兒のやるせなさに棄んとハ思ひかねど人ゐぬ僻郷に携行ハ取めぐる人もなくんと

前路のおがつらのさま情ある人の門もど邦とて愛よそなど蒼說を聞よその頃洞津の市よ出て弓賣る翁あり。きりて情ふき者とりくで其翁の袋る時をそうて路傍の木の枝よ籠よ入れて吊さるをひらひ取て懷よ入れ連ゆくとそこけて嬉しとハ思ひつゝも余波をさふ家ちゝきまで送り帰て後も時く行て垣間見れバ美く生さらめ程經て賣弓翁難波江よ移て住鳥羽上皇よ聘を又頼政主よ嫁さらと聞しらど世よ在バ女婚外男の名告をも為べきる身の濫行ありし故一兒をざる養ひて又姉と姪の行方も知ざるそづしさふ姿をく。

諸國遊行の時〻不圖も義廉主よ往會ひ互よ夫とも知ざりしが懺悔よ出處語をつゞるよ義廉主ハ我姉夫義俊主の甥の殿よて往昔龍田越の山路ゆて男を殺し老女を追ひ若干の銀と一人稚兒を奪取る其兒ハ現在姪の小枝玉環とハいざ不知又〻や多の貨よ換て待賢門院よまゐ〻せしハ人の為べき行ひハ又西京ゆて殺しる解魔ハ我三人の姪ひ君韓衣玉環ゞ讐人ぞと聞る時ハせあてもの罪からじと思よつけてもいゝ〻き世の厭しく今又門の外よ在てあやゞいるハの言を聞て姪の韓衣我女のゆやめる憑てつひよ自刃をさせる

典侍三女の
昊を祭て
姫宮大明神
と崇

のりさゑ疾くう名告出んと思へど折角おもひ切りたる恩
愛のきづな我道心を試ん為とざと息あるうちよ名謂ハ
為ざりしぞや頼政主親子をうづめ猪隼太ゲ三兒を害し
従母姉妹のめやめ中で命をうしなる三女そておそ已の心や
とゑぐ〳〵あげきよゑづしと義廉ハ立めぐり信俊法師ハ
女ゲ亡骸をうとめ泣をう追いつきめぐ〳〵兵庫の浦
よて待めてせん いくようぐ再會時ハ今をう期ゲさし
さ〳〵ばゑて鉦うちなし出て行く めやめのおの亡骸ハ西山
村の山よ葬めやめ塚として今よのゑるとぞ申めうよ鵜
村頼政村矢代の庄などの名のこうしる好るのめ〳〵呼び

め〳〵ハせるよやめ〳〵ん

白玉椿

典侍鵜炅を若狭よ祭て妖を禳話
頼兼綱雅を伊豆よ迎て家を興話

二条帝よ仕奉て典侍よめされる讃岐といへる女房ハ
頼政ゲ女めして國歌の誉ハ父よも〳〵不劣漢学の
才ハ父よも兄よもまさりて宮姫多〳〵といへども戈名
其右よ出る者めく帝よも時めうせめい〳〵ゲ父頼政高倉
の宮よ勤王の軍をはゑめ奉已罪とて申若狭の國田島
といへる處よ謫されて思のめのうち
我袖ハ汐干よえゑぬ沖の石の人こそ知ぬ乾ゑ時もを

と詠て千載集ニハ寄石戀として入させられしとぞ宮中
ニあるての詠歌ニもあるべきバさもあるべし歌うり世ニハ沖の
石の讃岐と呼びなせるうゐ〳〵しく最おかしなし監人
神尾若狭權守ハ情ある人ニて二あくめてたくゐるニぞ
時ニハ憂をも忘さる神無月廿日ごろ落葉の梢を辞
して風ニ飄ニ會者定離の理を觀残菊の枝を離きて霜
ふうるニ盛者必衰の旨を悲机ニもたれ頬杖突て在ニ
柴垣の外ニ人のけはひきれバ障子引ゐて女童してうゐハ
ゐるニ一人の男二人の女僧と一人の兒伴ひるが源三位の
所縁のおもくハるニやとおとゐしゆゑれバ先胸さわぎ

て〳〵といくさるニぞ入来る典侍ハ綱稚丸の恙なきを
ゐろこび笛竹群萩が姿ゐくるをめやしひあやめの方の
不在を歎ひゐ三人つゐるぐめしるどもおちあく語
つゐるニ典侍ハ始てその故を聞て累息し一人の女を殺
て久く早し一人の男を幽て不時霜を降ごゐ書ニ
載るをなどて蒼〳〵天一人の人の為ニ感動るめんやと
ひそやるニ歎ひ居ゐるをおろうめれ帝王の尊き御身
ニて三人の女をあやまり殺しのふ怨ニて代〳〵の帝
つぎて宝祚短く崇徳帝ハ遠島ニ遷れ給ふ高倉の
宮ハ流矢ニ中のふ天下三度まで乱れ昊場三度まで

焼れたり。我血属の亡びしことハ天子と
いへども善悪の報ハのがれぬハぢ也一条の帝誌ぞめを
後代君ゝるめゝるき勸誡あるべしとて漢文の体ゝ記
されしを神尾の家ゝ取り傳ふと聞しが今ハありや
なしや其夜ハ旅労さぞとてつきぬものがたりを為
さして四人を寐させれども典侍ハ終宵目も不合三女の
怨恨ハ尽けるゝ似ども伊豆ゝ在る才頼兼が
身の上綱稚が前路も心ゝぞ聞鰐ゝ臭も文章の理
ゝうして遠く去りゝとぞ扨て人ゝんの理聞ぬ
るやめるべきとて三女の霊を祭文を漢文ゝ記猪隼太ゝ

ゝく暗誦させて潜ゝ都ゝのがせ夜更て清水の丘ある畜生
塚ゝ行てこれを讀せ焼て灰とし酒ゝ和て塚ゝ灑て祭ら
しむ又外人をして吉田家ゝ就て三女の霊を祭鎮んるを
乞ひ西津と云る処ゝ一の社を建て姫宮明神と崇ゝ世ふ
ハ典侍ゝゝ死て其霊を祭ゝりといひ伝ふ其夜の夢ゝ
此君韓衣玉環と名のりて三人の美人典侍をふし拜西津
の方をさして飛去ると見てゝれバさてハ此後我家ゝ災
なしとて二人の女僧隼太ゝも語りてゝ心おごしく
ゝりぬ三四日過て伊豆の頼兼のもとゝ心利ある郎従を
のがせて綱稚を迎へ取りぬ隼太ハ従ひ行き笛竹群萩

二人ハ如律尼如秋尼として典侍のゆゑよりさぶらひ遥の後
めでたく終をとられしとぞ綱稚ハ後駿河守廣綱として右大
将家ゆ仕へ児ゆゑらて世ゆ多ひろぐらうと
語り伝へくらう或説ゆハ廣綱ハ太田氏の祖ゆて元暦元年
駿河守ゆ任建久元年右幕下上洛しゆゆゆゆゆて
ゆゆゆ世を遁て往方不知なども記せり さゝハ年次も
いとたがひぬけ書ゆ誌ハ元暦の頃ハ十一歳ぐらうゆやゆう
なん多識人ゆ問て其説の虚實を正しゆべし原表ゆ
書処〻虫ぐ〻脱簡らうがひらる条もありしゆ
補ふべしつれバ年次のさがひもゆんらしゆ

芍薬亭主人著述文化五年嗣出標目

人麿呂撰 阿古屋松 異聞大佛供養 五冊
龍女 秀卿 瀬田橋長物語 三冊
雙蛺蝶白糸冊子 五冊
鐘供養烈女照子 二冊

文化五戊辰年正月

詞客 芍薬亭長根
画人 菖蒲 北齋

十軒店 西村宗七
下谷御成小路 柏屋忠七 梓行